「だんじり」考

吉川正倫

○序に代えて

九月十四日、十五日は岸和田市の岸城神社の祭礼である。昔から、「岸和田のだんじり祭」とか「岸和田のけんか祭」の異名があり、その曳き方の勇壮さと共に、よく起る「だんじり」相互間の喧嘩、衝突が問題視された結果、警察関係の規制もきびしくなり、かなり穏やかな祭礼となったと聞いている。

実際にこの祭りを目にする機会を持ち、私自身の脳裡に想像していた「だんじり」と実際の姿の間にいくつかの差異を感じた。

その一つは、各町内会とも子ども会が先頭であり、続く青年団には中学生、高校生が男女ともに加わって「エンヤー・ソーリャ・ソーリャ」のかけごえで、ハッピ、鉢巻き、地下足袋姿で勇ましく走っていたことである。

また次には、「だんじり」の進路の規制があり、皆一方通行として、衝突する可能性を極力減らそうとしていたことである。このため、神社へ勢揃いする「だんじり」の行列というよりも、町内を巡回する「だんじり」の印象が強く現れていた。

第三点としては威勢よく町内を巡回する「だんじり」の屋根にのる鳶職の人数制限がされており、規制のきびしさを感じたことであった。同時に人のみがあり、神らしき存在を感じさせないことでもあった。

総じて「だんじり」は地車とも書き、祭の風流、即ち行列であり、新しい意匠を競い、年々目先をかえてゆくところにその本意が存すると思われるだけに、変化に富むところは興味深いのであるが、「地車」そのものが何れの町内のものも新しい彫物で飾られて居る反面、若い衆の数も勢いも、些か年少者に押され勝ちの印象を受けたのは、一つには規制のきびしさもあろうが、また一方では、若い衆の年代そのものの実数が

減少していることにも一因があろうと思われる。

但し、このだんじりの実像とは別に、私の脳裡にあった「地車」観について以下述べてみる。

ア　だんじりの発生

祭りに際し、特定の限られた人だけが参加して、神を送迎し、神に祈願を捧げる祭がある一方で、祭典に対して、多くの観衆というか見物というか、柳田国男によれば「祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々」[1]の出現するものがある。前者が、どちらかと言えば、人目を避けて、ひそやかに神の出自を待つ夜の祭であるのに対して、美々しく飾り立てることを主眼とする後者の方は通例「祭礼」として祭りと区別されている。だんじりは、まさにこの祭礼の立役者と言えよう。その所以は、祭礼とは、各種の祭りの中で大きい祭である。その大きい祭の特に一つの祭を祭礼とする特色として、柳田国男は「日本の祭」[2]の中で「一つに『提灯』を軒につるす、『幟』をたてる。更に、『神輿』の渡御、これに伴ういろいろの美しい『行列』であった。これを風流（思いつき）と呼んだ。」としている。

こうした風流は、昔からどの神社でも行われたものではなく、平安時代末期の院政期に知られる「日吉大社の神輿」とか「春日大社の神木」があり、京都祇園の山鉾、今宮の風流などという限られたものであった。

こうした行事が展開されるにつれて、祭りに参加しないだけでなく、信仰も持たないで、ただ審美的立場で観覧する人々が出現してきたのである。

然し、祭りに参加し得ない、というか参加を許されない人達の観覧に供するために神輿や風流が案出されたのかと言えば、そうではなく、元来は神をお迎えし、祭典後、お送りする行事であったことはいうまでもない。

ご神霊は、馬の背に立てた御幣に迎えたり、或いは神輿にお迎えして祭場にご案内し、祭場からお送りするのが、祭礼の最も大きい特色と考えられる風流であり、神輿の前後に連なる行列もその一つであると言えよう。

従って、神輿というものも地車というものも神霊をお迎えし、お送りすることが、その本意であったといえる。

京都の宇治県神社の祭礼の「ボンテン」の渡御のように、その行列を拝めば、目がつぶれるというのは、その本質をよく表わしているといえ

よう。

神は社殿に常住されているというのは、中古というか、神社が社殿を以て構成されるようになってからの信仰であるが、それまでの日本の神道では、神は祭に限って天より降臨されるという信仰であった。

この天より神が示現される最も顕著な例が落雷であったといえる。菅原道真公が、太宰府で、不遇の中にこの世を去った後、京都で落雷が相次ぎ、藤原時平を始め、世をときめく人々に不幸が続いたのを、道真公の怨霊の所為として、天満大自在天神として祀ったといわれる御霊信仰はその典型であろう。落雷にヒントを得た訳でもあるまいが、高い竿なり鉾を立てて、神を迎える目じるしとしたものが山車（だし）、山鉾のはじまりであったといえる。

山車とは、祭礼に曳く山・鉾・人形などを飾った屋台であるが、これをだしと呼ぶのは、江戸では屋台全体のことであるが、上方では屋台の中心として立てるほこや柱の先の部分のことであった。「和歌山県粉河町の地車（だんじり）のもち火と称する提籠（ひげと）は、最も顕著な例」[3]とされているが、鉾の先の部分に、神の依代（よりしろ）としてとりつける松や杉の葉、または竹で編んだ提籠の竹の編み残されて出ているものを「出（だ）し」と呼んだものであり、屋台の尖端に突出させ、神のよりしろとしたものの呼称が「出し」「山車」の呼称の始まりであったことは既に定説となっている。

山のように高いところ、竿や鉾の出たところ、それが神の降臨されるところとしたものだろうが、賑かに飾り立てる祭儀の例に、貞観五年（八六三）五月二十日の神泉苑の御霊会がある。三代実録巻七の条には、

「廿日壬午。於二神泉苑一、修二御霊会一（中略）、王公卿士赴集共観。霊座六前設二施几筵一。盛二陳花果一。（中略）以二帝近侍児童及良家稚子一為二舞人一。大唐高麗更出而舞。雑伎散楽競尽二其能一。此日宣旨。開二苑四門一。聴二都邑人出入縦観一。云々」とあって、神前にお供えをし、律師をして読経せしむるとともに舞楽、散楽を競演せしめ、一般人の縦観をも許している。尚此の時にお招きした御霊として「崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人（吉子）、及観察使（仲成カ）、橘逸勢、文室宮田麻呂」等の六座を挙げている。

こうした御霊会が、その後、祇園、北野天満宮、今宮などで行われるにつれ、次第に賑かさを増し、特に行列や芸能が大きい役割を示すようになるとともに、仮装した風流や、移動屋台として、台の上に鉾や竿などの出し物を立てた山車（だし）となったものであろう。

事実、平安朝には、神泉苑から内裏に参った移動神座としての標山（しめ）があったと伝えられている。前述の粉河町のだんじりは兎も角として、一

般に神迎えの標示である竿や鉾を立てたものを「山車（さんしゃ）」とか「やま」というが、鉾をたてないものを「だんじり」と呼ぶという。

とすれば、だんじりとは神迎えの標示をとりさった「山車」のことも言えるが、これを文字化すれば、山車に対して「地車」とも呼んでいる。また壇尻などとも書いて、如何にも彫物を施した壇の尻を引きずる感じを与えたようにも思われる。

祇園祭りでは「山」と「鉾」があり、「山というのは人形などで飾り、人がかついで歩いただしものである。いまはかつぐかわりに、山の下に車輪をつけて曳く。」「鉾のほうは、山よりはるかに大きくて、いつも巡行のとき先頭をゆく長刀鉾が二十一メートルあまり」「こちらはもとから車輪がついていて、大勢で綱をつけて曳く」[4]と米山俊直が説明しているが、鉾というのは神を迎えた標山の名残りであり、風流として囃したてる山の方は、元はかついだというが、岸和田のだんじりも神をお迎えしていないとすれば、「山」の転化とも考えられる。

イ　山と山車と地車

「山」は祇園祭りでは鉾を立てず、元来は人の担ぐ神輿様のものであったというが、他の土地では鉾を立てたのを山車とかやまと呼び、鉾のないのをだんじりと呼ぶ場合が多い。

案外、祇園の「山」に、だんじり（地車）と山車（やま、だし）の中間を結ぶ接点があるようにも思われる。

この風流の「山」を離れて、自然の山は、日本人の心の故里というべきか。島国で山に囲まれているこの国では、山から出て、山にかくれる日月を仰ぎ、山に去来する雲を眺めつつ、天上遥かな霊界と此世の階梯のように山を思うことが多かった。

このことが、農耕神としての田ノ神が、秋冬には山ノ神となり、春夏には田に降り立つ信仰ともなれば、山が祖霊の常住するところとも信じられてきた。

山頂の小高くなっているところは、天に最も近いという発想であろうし、これは、海の岬が海原遥かの国に最も近いという水平的信仰とも相結ぶものである。

神観念としても海では宗像の神のように冲っ宮と辺っ宮とが神の彼方、此方を結ぶ如く、山頂近い山宮と里方の里宮とが山に囲まれた地域で信じられてきた。この際、神霊の宿りますのは冲っ宮、山宮であり、拝むのは、辺っ宮、里宮であるものが、海原と浜辺、山と里との神の巡幸

にやがてつながってゆくものと思われる。

一方、祖霊についても、忌むべき死の穢が、歳時とともにうすれゆき、やがて、晴れて聖なる存在として神化されてゆけば、里を離れた山の一角に居住するものと信じられ、「先祖の話」で柳田国男が説く如く「魂が身を去って高い峯へ行くといふ考へ方と、その山陰に柩を送って行く慣行との間には、多分関係があったろう」[5]ということになる。

この点で、山とは元来、神の出現する所であった。「滋賀県野洲郡三上村の宮幣中社御上神社の祭神天之御影命が、孝霊天皇六年六月十八日三上山頂に出現ましましたと説いて、毎年この日を以て神職氏子一同が山頂に登って祭祀を行ひ、降って本殿祭を仕へ奉るを例とし、これを特に『奥宮祭』と呼んでいる」[6]の如く、もともと山頂を神の寄る聖地として、別に里宮として拝所を設けたものが漸次変化した末、山頂を奥宮として、拝所の里宮が御霊代を備えた社殿となる例は我国には多い。大和の大神神社の如く神山を直ちにご神体とする例もまたあるが、里宮が盛大になるにつれ、奥宮との交流を、中間地点の御旅所へのご巡幸に代える形に展開することもまた数多いのである。

山頂より、神を里宮にお迎えし、また里宮から山頂の山宮へお送りする例は、田植の際の農耕神事である「サオリ」「サナブリ（サノボリの転訛）」を始め、神社の祭儀にも例が多い。「山梨県の下宮地の三輪神社の四月卯日の大祭の神事の節は、その前夜丑の刻に神主が神體を捧げ無燭無言にて山宮へ移し、翌朝本社に帰って神事を終る」[7]という。

山車とは、こうした山宮から里宮へ神迎えをし、里宮から山宮へお送りする行事を儀礼化する中で生れてきた風流ではなかろうか。

山車（やま）の意は、山そのものに神をお迎えするという以前に、山と里との神霊往復の際にいう「山に行く」との語が名詞化されたものであろう。

一方でまた、山車そのものを曳き廻すことにより、神霊の降臨を願ったとも考えられる。

京都、上賀茂神社に伝わる葵祭に先立つ「御阿禮（みあれ）神事」はその間のいきさつを物語っているようである。

「當日（現在五月十二日）は神社より宮司以下、御阿禮所に参向し、御園に向ひ一拝し、幄舎に着き、葵柱を挿頭にする。次に献の式、手水あって庭燎を消し、暗闇のうちに奉幣あり。裂幣を榊に附く。神人榊を持ち御園正面の立砂を三匝（そう）（巡）して佇立。宮司以下は神館の座に北上西面に着く。次で雅楽頭代笏拍子を打ちて秘歌を奏するうちを神人榊を持ちて進行し、裏門より社頭橋を過ぎ樟橋を渡り、楼門前を経て新宮門に入り若宮社本殿前を経て中門に出で棚尾社に榊二本を挿し置き、楼門を過ぎて玉橋を渡り、二鳥居を経て御所舎の南方権地に榊三本を安置し

三匝一拝。次で宮司以下昇殿して透廊の座に着き、開扉、小庭に松明を挙げ、殿舎の燈籠に火を点じ、次で葵桂を献じ、片山御子神社にも献じ畢って祝詞を奏して閉扉退出するのである。[8]」

この御阿禮は「御生(ミア)れ」であり、生れませる神霊を裂幣をつけた榊にお迎えして、社にまつったのである。

約30年前にこの行事を拝した時の感じから、この文を読む時、神迎えに当り、立砂を三回廻る時に神霊が宿り給うと観ずるくだりが実に鮮やかである。

賀茂の例祭の葵祭を執行するに際し、天神を迎えまつる神事であるが「山」なり山車、また地車を曳いて町内を巡回するのは、風流として観衆に見せる行事になる前に、神迎えの儀礼ではなかったかと思うのである。祭礼の神輿が、里宮から山宮に赴かれるのは神迎えのためであったとすれば、本宮からお旅所への巡幸、あるいは御旅所なくして、町内を巡回されるというのは一つのミアレの神事であったとも考えられる。

こうしたことが、一方で、山の神が産神とされる所以ではあるまいか。

山の神が何故お産の神であるのかという理由は、今日尚、民俗学上の課題である。

秋田県川連(かわつら)の山の神迎えの例がある。[9]

「この地方では、産神は、以前から宮城県小牛田(こごた)の山の神であった。神迎えの方法は、屋根に上って南方に向かい、『ワラシナシが始まった、マメデナシ（安産）のように』と祈願する。ただ山の神もすぐには来られない場合もあって、そうすると難産の様子になったりする。産婆は、まだ山の神がこないので、なかなか生れない、早く呼ぶようにと再三主人に告げる。すると主人は、南方の山の神のいる方向に向かって迎え馬を出すのである。山の神はこちらに向かってくるのであるから、途中で出会うはずであり、南に向かった馬が山の神に出会うと、その場に止って動かなくなる。そこで『山の神さま、馬に乗ってください』と言って、元へ引き返す。家に着いて、山の神の到着を告げると、産婦は安心して出産できる。もし山の神の到着が遅れ、遠方まで行ってから引き返すことがあると、難産で死んでしまうことがあるという。こうした場合は日頃山の神信仰の薄い人だったといわれており、多くの女性は出産のことがあるため、日頃山の神への信心はきわめて厚いのである」と

こうした産神が山の神であると信じている地域は、東北地方一円から、関東・中部地方にも及んでいるという。

神の示現を願って、山へ神迎えに行くという姿が、ミアレの信仰とともに出産を守る神につながったと見ても不思議ではあるまい。

山、山車、地車の呼称から、神迎えの一つの儀礼が様式化されてきたのではないかと考えた次第である。

ハ　結　び

地車と書くように「だんじり」は、山とは直接に結びつかなくなってから現れた呼称であったかも知れない。しかし地団駄を履む等と呼ばれるように多勢の若者が大地を踏みしめて走る様は「だし」というよりは「だんじり」といった方が適当であるように思われる。

秋の収獲を控えて、大地に住む悪霊を退散させ、無事穀霊が稲に結ぶように祈願するのが、こうした風流を生じた一面であったともいえる。

しかし、山へ神迎えに出向き、神の降臨を願う儀礼が、お旅所と本宮の往復に代り、更に町内を巡回して、神の示現を願う形になった時、新しく大地を踏むことに意義が見出されたのであろう。

やがては、祭りのたびごとに、神が、神をまつる氏子信者の家々を訪れることに意味が重んぜられるようになってくると、行列を組むことは、それぞれの町内会に対する示威ともなり、曳き手の若者の威勢を示すことになってくる。

神の降臨を願う気持よりも、祭に参加しない観衆を意識するようになったため、だんじりを曳くことによって味わう自己陶酔と観衆への示威のないまざった形で、現在のだんじり観が進んでいるとも言える。

風流とはやはり、移り変るものであり、いろいろな思い付きが現れるものである。

註
(1) 柳田国男「日本の祭」39頁　角川文庫　昭和31年刊
(2) 前掲書　36頁　37頁　38頁
(3) 民俗学辞典　351頁　東京堂　昭和26年刊
(4) 米山俊直「祇園祭」24頁　中公新書　昭和49年刊
(5) 柳田国男「先祖の話」　20頁　筑摩書房、昭和21年刊
(6) 堀一郎「遊幸思想」　201頁　育英出版、昭和19年刊
(7) 堀「前掲書」203頁
(8) 官国幣社特殊神事調三の9頁　堀一郎「前掲書」　200頁所収
(9) 宮田登「神の民俗誌」44頁　岩波新書　昭和54年刊